



『ベナー ナースを育てる』

評者・村上 明美 神奈川県立保健福祉大学

今回、敬愛するベナー博士の新刊『ベナー ナースを育てる』を書評する機会をいただき、心から感謝を申し上げます。

博士は、現在の複雑化するアメリカの看護実践環境に看護師が適応できるには、看護教育を劇的に変革する必要があると訴えている。本書は、カーネギー財団による大規模研究を通して明らかにされた、いわばアメリカ看護教育への挑戦状である。日本の環境との重なりも多く、わが国の看護教育にも豊富な示唆を与えてくれる。

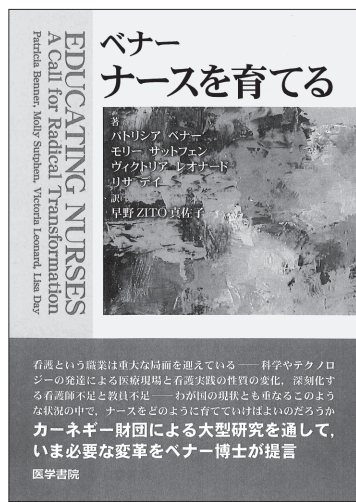
ベナー博士は、アメリカ看護教育に4つの転換を提案する。

①教育の焦点を「脈絡から切り離された知識を網羅すること」

から「特定の臨床状況における重要性・非重要性の識別力、状況下での認知と行動を教える教育」へ、②「臨床現場と教室における教育を明確に区別すること」から「教室と臨床での教育の統合」へ、③「クリティカルシンキングの強調」から「臨床的論証とクリティカルシンキングも含む複数の思考方法の強調」へ、④「社会化と役割取得の強調」から「形成の強調」への転換である。これら4点は、極端な言い方をすれば、「看護学生を専門職として育てるには、臨床と教室を合体して教育すべきである」という、いかにも卓越した実践を重視する博士らしい論理で展開されている。

これまでのように学生に理論や原則を教え、

看護教育の変革を見据える 新たな視座



パトリシア・ベナー、ほか 著

早野 ZITO 真佐子 訳

定価 4200 円(本体 4000 円+税 5%)

A5 判/医学書院/2011 年

その枠組みで臨床状況を分析させて行動を導くのではなく、生々しい臨床に学生が身をおき、体験する現象を丁寧に整理・識別して、行動しながら考える能力を培えるような教育を推進しているのである。しかしながら、すぐに直面するのは教員の教育力の問題であろう。

看護教育の効果的な学習法として提案する「徒弟式学習」も挑戦的である。看護の知識を学び、熟練したノウハウを学び、倫理的態度を形成する学習である。これら3領域が同じように強調され、統合的に教えられることで専門職を育てることができる。

「徒弟制」というと、西欧手

工業ギルドの技能教育や日本の丁稚奉公などをイメージしやすいが、ベナー博士は慎重にこの言葉を用いている。「徒弟式学習」は高度な徒弟制を意味するという。ただ模倣するだけでなく、創造的で批判的に思考し、疑問を問いただし、行動を革新していく。そのことが専門職実践の学習の中心にある。学生が、医療ケアチームや実践コミュニティ、患者や家族の徒弟になることは、臨床の状況を把握し、状況に即した理解やスキルを向上させ、知識を活用する能力などを修得するために不可欠であると述べている。

「徒弟式学習」の表現に関しては賛否両論だが、実践なくして学問たり得ない助産教育においては、ぜひ導入したい学習法である。